平成二年度　春季公開講演要旨

「妙好人」攷

本学教授　大屋憲一

妙好人については、今日まで、幾多の人々が挙げられ、紹介されてきている。このことは、妙好人とは教学的見地に立ってというようなことではなく、謂わば、直接的に教法を身を以て地でゆく、その実際に立つ人々であるだけに、どうしても、私共の関心を惹きつけざるを得ないものがあると云うことである。

それ故、私はこのような妙好人が取り上げられ来った時代背景等についても、何かと論ぜられ来ったものもあるが、それは一応差し措いて、私共は妙好人の本義に帰って、お念仏を地でゆく、このような人々の言葉に傾聴することが大事なことであると思われる。

このような点で、鈴木大拙著の『妙好人』は、謂わば、妙好人に関する研究書としては、最初のものであるが、この書が、又、妙好人の名を世に高からしめ、弘めたことは、思うに、大きなものがある。

然しながら、これまでの幾多の書をみるに、その中には、ともすれば、妙好人の生きざまを称讃するの余り、時には、世ばなれしたような生活の一面のみが強調される結果となっているものがあることに気付く。

本来、妙好人とは、『観無量寿経』に「若念仏者、当知、此人是人中分陀利華」とあり、以下、中国の善導、法然、親鸞にも、同様にこの内実が示されている。それは、他言すれば、在家業縁の毎日の生活の中にありながらも、念仏裡に、本願の名号を聞き、そのお念仏の生命の中に、いきづきながら生きてきた人々である。

それ故、私は、以下、このような妙好人の考究に当って、先ず、妙好人が浄土真宗に於て取り上げられたその背景を、次いで、今日までの妙好人の研究の次第、更に、或る一人の念仏者を通して、その妙好人の内実に一歩でも迫りたいと思う。

一

では、同じ浄土教の中にありながら、浄土宗には、主として「往生仏」が現われ、真宗には「妙好人伝」のみが現われたその事由は何であったであろうか。先ず、この問題より考察したい。

「往生伝」は『高僧伝』や『日本霊異記』又は『仏教説話集』等にもみられるが、平安中期には、源信の『往生要集』と相前後して出た慶滋保胤の『日本往生極楽記』を初めとして、『続本朝往生伝』、『拾遺往生伝』等、その他多数の「往生伝」が刊行された。然も、これらの「往生伝」は、平安浄土教以来、伝統されてきた「臨終来迎」に相応するものであって、この「臨終来迎」に対する取り組みの如何が、「往生伝」の成立に大きく関わるものと思われる。それ故、以下、この「臨終来迎」に対する法然、親鸞、及び法然のお弟子の方々の姿勢について、その一端を考察しておきたい。

先ず、法然はその『和語燈録』にもみえるように、衣食住の三は念仏の助業となるべきものであって、行往坐臥、時節の久遠を問わない、平生、臨終たるを問わず、常時に念仏すべきことを説

かれている。そこに、「順彼仏願故」の称名念仏が強調されているが、かように、法然は第十八願を四十八願中の王本願とするが故に、『拾遺語燈録』、又、『西方指南鈔』にもみえるように、決して、従来のように、臨終正念にして、念仏を申し、臨終来迎を期することを説くものではなかった。そのように云い得よう。

然し、その後、法然門下の中には、聖覚法印の『唯信鈔』にも「念仏の門に入りながら、なほ余行をかねたる人は、そのこころをたづぬるに、おのおの本業を執じて、すてがたくおもふなり。あるいは、一乗をたもち、三密を行ずる人、おのおのその行を廻向して、浄土を願はむとおもふこころをあらためず、念仏にならべてこれつとむるに、なにのとがかあらんとおもふなり。ただちに本願に順ぜる易行の念仏をつとめずして、なほ本願にえらばれし諸行をならべんことのよしなきなり」ともあるように、念仏をむねとすといえども、また余の行をもならべる雑修の行が行ぜられてくる。即ち、諸行を切りすてるのではなく、諸行を用いる人々が出てくる。然も、このように念仏が諸行と共に用いられ、謂わば、行の性格を帯びる場合には、その念仏は日常生活そのものとは距てられる場をもつことになる。更には、又、このような事情は、諸行往生には臨終来迎が期せられることにもなって、ここに数々の『往生伝』が輩出したことも推察され得る。

では、以上の如き事由も含めて、親鸞の御所述は如何ようであったであろうか。その一つとして、聖人は『末燈鈔』第一通には「来迎は諸行往生にあり。自力の行者なるがゆへに、臨終といふことは、諸行往生のひとにいふべし。いまだ真実の信心をえざるがゆへなり。……真実信心の行人は摂取不捨のゆへに、正定聚のくらゐに住す。このゆへに臨終まつことなし。来迎たのむことなし……」と述べられている。正定聚とは、どこまでも、煩悩の断ち難き、手放そうにも手放し得ぬ凡夫たるものの中に働き出られたお念仏の、その摂取不捨の願心に喚び覚まされたものの相であろう。そこには、毎日の生活の中に、念々にその名号に聞いていく念仏者の相がある。覚如は、又、『改邪鈔』の中で「つねの御持言には、われはこれ賀古の教信沙弥の定なり」という親鸞の言葉を書き留めているが、このような教信沙弥の生活こそ、後世の所謂妙好人を刻印づけるものがあるように思われる。

二

では、次に『妙好人伝』についてみるに、先ず挙げられるのは石見国（島根県）の仰誓（一七二一―九四）の『妙好人伝』である。この伝は、仰誓が布教のため全国を廻る中で、自ら見聞した真宗の篤信者の行実を集録したもので、その刊行は仰誓没後、約四十年を経た一八三〇年（天宝十三年）になされている。勿論、この伝は、仰誓の弟子、僧純（一七九一―一八七二）と、それから松前の衆王により続けて編まれて、計六巻より成るが、この伝に挙げられた人々は、仰誓も述べるように「真実信心の人々多い中に、殊に勝れて世の人の範」たるべき人々であった。然も、その多くは、無学の庶民であって、このような人々の中に、仰誓は篤信の念仏者の姿をみて、驚きとその讃嘆の念が止まなかったのであろう。懇切に、これらの人々を取り上げている。

然しながら、この『妙好人伝』以後、妙好人とは、無学の庶民たるべきことなど、その他、妙好人の生活の一面のみが強調される結果となって、それが恰かも妙好人たるの条件であるとするような感が生まれてくる。確かに、そのような一面性は考慮に値す

るかもしれないが、然し、念仏者としての妙好人の義に照らせば、それらを、却って条件とするかの如きには、納得し難いものが思われる。

次いで、明治以降の妙好人の諸伝記については、『庄松ありのままの記』、藤秀璮著の『大乗相応の地』、『新撰妙好人列伝』その他が挙げられ得るが、就中、妙好人の名を高からしめたものは、前述のように、鈴木大拙による妙好人の研究であったと云ってよい。鈴木大拙の著作中より、殊に、浄土教に直接に関わるものとしては、『仏教生活と受動性』（昭和8年）、『禅と念仏の心理学的基礎』（昭和12）、『浄土系思想論』（昭和17年）、『宗教経験の事実』（昭和18年）、『日本的霊性』（昭和19年）、『妙好人』（昭和23年）その他が挙げられ得る。

然しながら、私共は妙好人に関わるものとして、以上の他に、『香樹院語録』、『貞信尼物語』、『求法用心集』、『信者めぐり』その他数多くのものを、忘れてはならないであろう。

三

1

以下、当論の一つの目標でもある〝妙好人の言葉に聞く〟、そのような意味で、長年にわたる求道、聞法の生涯を通された、既に、御存知の方もあるかと思うが、木村無相さんについて、及ばぬながら、述べておきたい。

木村無相さんは、その晩年、身寄りなき身を、福井県武生郊外の和上苑に於て過ごされ、この地にてその果てなき生涯の旅路を終えられた。時に、昭和五十九年一月に、八十才で示寂された。その生前に出された唯一の本は『念仏詩抄』であるが、ここには、長年の間の聞法の歩みを、その折々の思いにつけても書き留められたものが、諸先生のお勧めにより「念仏詩抄」となったと聞いている。この詩抄にある一句、一句は、意識しては書けず、日頃、浮んでは消えてしまうような句であるだけに、自分で書いて、自分で有難たがっていられたようで、称名念仏裡に、聞法の日送りをされる無相さんの心のうちが垣間みられることである。

この『念仏詩抄』は、その没後、『続念仏詩抄』、『続々念仏詩抄』と次々に、多くの念仏詩が編まれているが、これらの秀句の中にあって、私にとり、なお、かつ深い関心を惹くものは、この最初の『詩抄』の末尾にある次の言葉である。

念仏詩抄の最後には、敬信老人（伊賀三左衛門）のお歌をいただいて

敬信老人　七十四才

〝はずかしや
筆にあらわす領解文
カリ・ニセ・ウソの
こころのみにて〟

としたことでありますが、今、あとがきを書くにあたって、一層、その感を深うすることであります

と。右の言葉はこの『詩抄』を貫く心を示されたものであって、私のはからい、煩悩の一事を、どこまでも手放されなかった無相さんの透徹せる生きざまが、よく示唆されているように思われる。

では、このような無相さんの求道の機縁は何であったであろうか。無相さんは、或る時、自らその動機について「二十才の折に、或ることが機縁となって、外に向けられていた眼が、一斉に自分

の内に向けられ、我が身の煩悩無尽に気付かされて、……今生で煩悩を断じて、今生で悟を開きたかった……」と云われているが、又、或る書簡の中で「自分は父母との離別等々、若い頃よりの苦悩の末に、どう生きていいのか分からなくなって、何度も自殺を思いたった。二度は実行してやり損って、結局、死ねずに生きてきたが、生に背中を向けつつでも、死の壁は厚いから、自殺も出来んから、生きている価値は見出されなくても、生きてるほか無いということになったのです」と当時の心境を語ったものがある。

無相さんは、この苦悩の末に、求道の旅へと思い立たれる。その途次に於て、松原致遠師の寺坊に三年間、滞留されたが、その間に、松原師が常に説かれた香樹院師のお言葉を御縁として、香樹院師に御縁の深い滋賀県源通寺の禿顕誠師、義峰師を尋ね、その後も引続い尊い御法縁を得ておられる。その切々たる様子は、多くの書簡に於てみゆることであるが、又、金子大栄先生に最初に値われたのも、丁度、この頃のことである。

無相さんの聞法の道は、求道六十年とも云われるように、けわしく長いものがある。昭和八年（二九才）に四国の香園寺の三密学園に入ってより、同三十三年（五四才）の間に、真言宗と真宗との間を、三度、往復し、同年七月を最後に下山されている。三密学園での中心講義は、猛菩薩御作という「菩提心論」であって、当時、山岡瑞円師が、実に熱心に講ぜられたと聞いているが、この時より、最後の下山に至るまでには、既に、二十五年の歳月が流れていたのである。

無相さんは、自ら、この歳月を振り返って「往生極楽、生死出離、転迷開語、成仏ということは、我々凡愚の力では、どうあっても不可能であるのに、念仏往生の誓願に、お念仏に、自分の生死出離の全体を、まるまるおまかせすることが出来なくて、何とかして、自分の力で、凡夫の力を頼みにして助かろうとすることが止まないのでした。何というしぶとい自力心でありましょうか」と云われている。

このように、無相さんにとって、聞法求道の歩みは、一筋に何の行きづまりもなく行われたのではない。その求道の途次にあっては、幾度、道に踏み迷い、途方に暮れたことであろうか。或る時には、自分は仏法者でも念仏者でもない。とても仏法を学ぶような人間ではないと、一時的に社会生活に戻ったこともある。然も、ここでも「既に此の道あり」と知らされ、気付かされることによって、又、求道、聞法の旅に出るが、無相さんによれば、求道一筋というけれど、求道一筋ということはない。それは有縁の人々に励まされ、後押しされながら、この聞法の道を歩むことが出来たのですと。又、聞法の厳しさというよりも、如来様のご苦労の厳しさが思われますとも述懐されている。

2

次に、このような時期に、御縁のある方々に寄せられた沢山の書簡をみるに、その諸書簡の中に流れる無相さんの一つの中心的な味いは、第二十願に於て誓われた「果遂の誓」にあると思われる。それらの書簡の詳述は差し措くとして、無相さんの『念仏詩抄』には、このことを

〃定散自力の称名は
果遂のちかいに帰してこそ
おしえざれども自然に
真如の門に転入する〃

自力の念仏　そのまんま
他力とわかる　ときがくる

自力じゃ念仏　もうされぬ
信前信後　みな他力

念仏そのまま　純他力
ナンマンダブツ　ナンマンダブツ

とも句作されている。ここに無相さんは『浄土和讃』を引かれて、その「果遂の誓」（その左訓には「しりきのこゝろにてみやうかうをとなへたるをばつひにはたしとけむとちかひたまふなり」とある）を「自力の念仏、そのまんま、他力とわかる　ときがくる」と味読されている。『香樹院語録』には、私の念仏は空念仏である、うその念仏であるとか、そんなことは云わないで、私の心がどうあろうとも、そのまんま、お念仏を称えなさいと勧められているが、又、『詩抄』の他の句には、「ナムアミダブツはおやのみ名」とも句作されているように、弥陀のまこと、お念仏の懐の深さが味読されている。『歎異抄』第九条も、又、このことが、よく述懐されている一文であるが、私共は、ともかくも、この「自力の念仏　そのまんま　他力とわかる　ときがくる」という一句を、そのまま、何度も味読したいものである。

又、この句中の「信前信後、みな他力」ということについても、私共は、ともすれば、信後はそういう定散心などは全く起らない、本願に対しては、と云いがちであるが、ここでは、そのようには云われない。機の方より云えば、どこまでも、人間は久遠劫来の根性がある。機はそれ程に助かりようのないものだということを、私共は、ここで、はっきりさせてもらったような感がする。

以上、「果遂の誓」に願われた念仏の身なるを、求道六十年、身を以て聞き開かれたところに、無相さんの所謂「ただ念仏して」、或いは「仰せ一つ」の一事があると云えよう。

無相さんは、既に早くより、この一事については知らされ、聞くこともあったであろう。然し、理想と現実とは異なる。それ故、究極的に「ただ念仏して」ということに、身が落ち着くまでには、様々の道程があったわけである。サッサと煩悩を放り出すことも出来ず、いい加減なところで有難くなってしまうことも出来ない。一歩も半歩も離れようとして離れられない煩悩、はからいを最後の最後まで、手放さなかったところに、無相さんのお念仏の実際がうかがえる。

3

親鸞の『末燈鈔』第二通に、親鸞は「わがはからひのこころをもて、身口意のみだれごころをつくろい、めでたうしなして、浄土へ往生せむとおもふを自力と申なり」とも申され、同じ第二通中に「自力の御はからひにては、真実の報土へむまるべからざるなり」とも申されている。ここには、凡夫ごころにおこる有難いとか、分かったとか云うはからいの心をもて、生死出離に間に合わせようとするそのあやまりをさとされ、わが身をたのみ、わがこころをたのむような自力のはからいでは、真実の報土へ生まることは出来ないと述べられている。

又、同第五通の「自然法爾」の事では「弥陀仏の御ちかひの、もとより行者のはからひにあらずして、南無阿弥陀仏とたのませたまひてむかへんと、はからはせたまひたるによりて、行者のよからんとも、あしからんともおもはぬを、自然とはまふすぞとき

きてさふらふ……」と申されている。このように、聖人がはからふな、はからふなと、繰り返しさとされているのは、凡夫の往生は、まるまる如来の御はからひのみにて充分であるからであろうが、それがなかなか止まないで、手を変え、品を変えてはからい、御廻向の念仏は、なかなか頂かないところに、私共の聞法上の悩みがあることである。そして、無相さんの求道、聞法のご苦労も、又、ここにあったことを知る。

無相さんが、屢々ご法談の中で語られたものの中に次のようなものがある。

「江州長浜のさだ女、香樹院講師に随い、聞いても聞いても疑いが晴れず、加賀まで随い行きしが、師いわく、雪も降り、寒くもなるゆゑ、もう帰れ、さだ女いわく、私はどうも信ぜられませぬ、疑いが晴れませぬ、聞こえませぬが如何致しましょう。師いわく、そのまま称えるばかりで御助け、その外なにもいらぬぞ」と。

ここに、香樹院師は、信ぜられぬのは、疑いが晴れぬのは、聞こえぬのはいかんなとは云わないで、そのままと言って、疑いが晴れぬば晴れぬまま、聞こえねば聞こえぬまま、称えるばかりでお助けと言う、謂わば「ただ念仏して」という本願念仏の道を述べられている。先述の「聞いた心が仏法ではない、仰せが仏法とはこのことじゃ」と言う念仏の「仰せ一つ」ということも、又、ここに了解されるのであるが、無相さんの最後の言葉は「煩悩のおかげで　願に値いえたり　煩悩さまよ念仏さまよ」であった。

四

以上、その生涯をかけて聞法の道を歩まれた木村無相さんを通して、その妙好人としての相をみてきたが、最後に鈴木大拙著の『妙好人』について、その幾分なりとも言及しておきたい。

先ず、鈴木大拙は、自らも述べているように、その論述はどこまでも、自分の宗教体験、或は、宗教意識を、様々な場面に適用、応用したものであって、浄土や真宗を論ずるにしても、それは「わが浄土観」であり「わが真宗観」である。従って、その論述態度は

「これは私が禅宗の立場から、南無阿弥陀仏を解釈するのであるから、真宗の方では、また、この解釈と違うのかも知れない。二つに見ないで、一つの宗教的体験というものからみるというと、昔の人が何と言っても、また、どういうことがあろうとも、そういうことにかかわらず、自分の一つの体験として、そこに自分だけの融通をつけ得ると思う。批評は諸君に一任したい」

というふうに、典型的に述べられている。

然らば、その宗教体験について述べる一つの言葉は何であったであろうか。それは「受動性」ということである。鈴木大拙は『無心といふこと』の中で、

「無心になると、心がないといふことになる。……心がなかったら木石に等しいじゃないか、かふ云ふのです。ところが宗教の極致といふものには、木や石のやうになってよいと云ふ所があるのです。そう云ひますと、人は木や石じゃない。人間には血がある、温味がある、意識がある、心がある、神経がある、ああいふ木の片や石の固さのように無神経じゃないと云ふのです。……成程さうなのですが、そのもとをもう少し推し進めてみると、やはり、木や石などを石たらしめるところの、何か無意識的なものに突き当るのです。そこに絶対受動性といふや

うなところがある。それを体得しなければいけないと云ふのが、私の主張です」

と述べている。このように、「受動性」は鈴木大拙の「無心」なる宗教体験の更なる表現である。それは「宗教経験の極致」として、又、「宗教の最後の立場」として、或いは、「宗教生活」として述べられ、更には「霊性的自覚」のこととして論ぜられている。又、更に、鈴木大拙は次のように述べている。

「他力、受ける、向うから授けるのを受ける、すなはち、受動性というものが宗教にはあるのです。この受動性がいろいろな型となって、真宗には真宗の、禅宗には禅宗の、キリスト教にはキリスト教のそれぞれの型がある。その型で受入れるが、一寸見たところでは甚だ違ったやうでも、その本を探して来ると、心理学的に受動性といふものが、何れの宗教にもある」と。

そして、その「受動性」のイメージなるものは「動かせば動く、坐らせれば坐る、蹴飛ばせばとばされる。そして、別に何とも不平を言わぬ」というものであるが、私は、ここには、人が理屈ぬきに、因縁の流れに同化、随順して、そのまま動いている相が表われていると思う。つまり、空とか無心という言葉に較べて、この「受動性」なる言葉は、文字通り動きを表しているのみならず、空、縁起がわが具体的な身の上に露わになるその態様を感じさせる言葉と云える。そして、更に、又、この「受動性」なる言葉は、後には「ありのまま」「そのまま」なる言葉に於て用いられることになるが。

では、最後に、真宗への対応と云うか、妙好人才市の念仏について一言すれば、鈴木大拙は、どこまでも、才市の念仏を、謂わば、無心の念仏に於て受けとめているところがあると思われる。

然しながら、先述の「自然法爾」の文に「弥陀仏の御ちかひの、もとより行者のはからひにあらずして、南無阿弥陀仏とたのませたまひてむかへんと、はからはせたまひたるによりて……」とあるように、浄土真宗のお念仏を頂く者にとっては、かく無心の念仏と云うことでは云い切れないものが残るであろう。このことは、又、才市にも、或は、先述の木村無相に就いても、云い得ることであろうが、この点は、今は割愛することにして、以上でもって、妙好人に就いての考察を終えることにしたい。

（了）